

島村鼎甫の業績と記録

津下健哉

一・生い立ち

鼎甫は御目見医者、のち御郡医者格津下古庵(五代)と妻あや(綾)の次男として天保元年備前上道郡沼村で生まれる。長男精齋(恒太)の弟で、年齢は四つ違いである。幼名を享二、または貞蔵⁽¹⁾という。内藤二郎氏の調査によれば天保三年の宗門帳記載に次のごときものがあるという。

一 津下元養 六月二十五日苗字御免 歳三十一

妻 // 二十九

子恒太 // 六

子亨二 // 二

父津下古庵(四代) // 六十一

母 // 五十五

合六人内男四人、女二人

下人虎之助

〃四十五

次に天保四年の願留には⁽²⁾

奉願上 十二月十四日御聞届相済

一 上道郡沼村御蔵百姓医者津下元養抱田畑三反五畝二十歩家内六人男四人女二人御座候内悴亨二歳四宗旨真言宗同郡北方医光院旦那岡山上之町柴屋志げ為二甥二而御座候ニ付同人方江引請養育仕度奉存候尤遣申以後は志げ家内同宗日蓮宗黄門山瑞雲寺旦那那二罷成申候右亨二遣候而も跡作指支申義無御座候尤町御奉行様江八同町名主より御断申上候願上之通被為仰付候ハバ有難可奉存候己上。

天保四年己十二月

上之町柴屋 志げ

幼少ニ付代判

組頭福田屋 清次郎

沼村医者 津下元養

右之通吟味仕相違無御座候願上之通被為仰付候ハバ沼村人馬帳外シ上之町名歳帳江書入申し度奉存候己上。

上之町名主

赤穂屋 徳右衛門

同郡屋 重左衛門

沼村名主 弥八郎

右の通承届相違無御座候己上。

惣年寄 河本又七郎

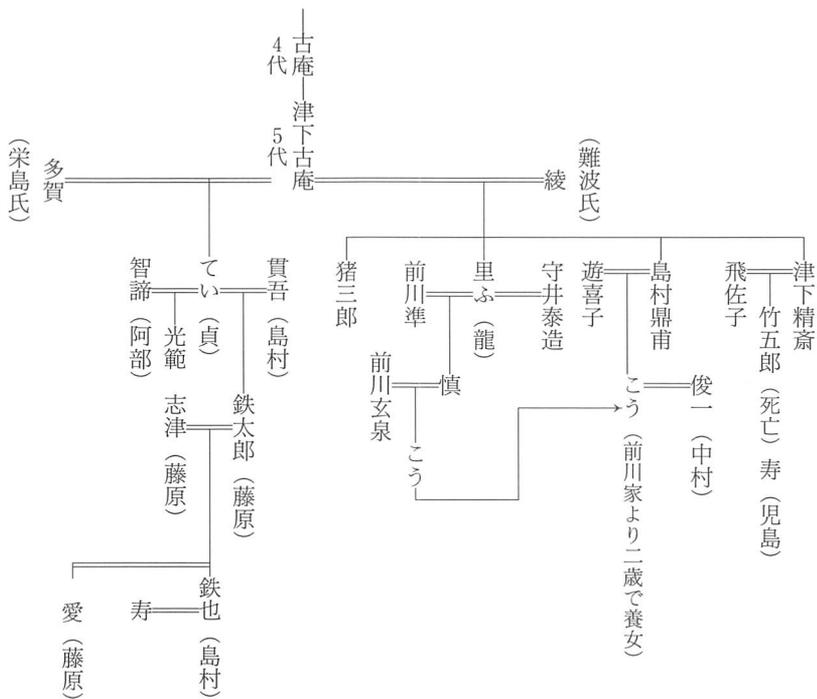
大庄屋中井村 藤左衛門

以上で次男亨二は四歳にして伯、叔母たる岡山上之町柴屋志げ方に養子に行つたこととなる。島村姓は伯、叔母である柴屋が島村姓であつたのであろう。彼の墓表によれば「祖某島村氏来嗣津下氏」とあり、また「鉸仲亦出繼島村氏」とある。ここに「鉸仲」は鼎甫の字であり、またしばしば「柴軒」の号も使つていたが、この柴は柴屋の柴を取つたものであろう。内藤氏は宗門帳よりして三代古庵が麻宇那村庄兵衛悴を養子としたが、この家が島村姓であり、その姉妹が柴屋志げではないかとしている。弘化四年三月、鼎甫十七歳の時、実母「綾」の死にあい、やがて新しい母「多賀」を迎えるが、養家での彼には精神的打撃はさほど大きいものではなかつたであらう。津下—島村家系図については図一を参照されたい。

島村鼎甫についての記録は『上道郡誌』に比較的詳しいものがあり、『備作医人伝』にも同文が載つている。それによると

「氏は字は鉸仲、柴軒と号す。浮田村沼の人なり。父は津下古庵、津下精齋の弟なり。出でて島村氏を冒す。少にして才思敏胆出でて姫路の仁寿山校に学び、又大阪に至り後藤松陰に師事す。既にして緒方洪庵の門に入り蘭学を攻め石井信義と同学たり時に洪庵業最も盛に門下俊才多し。其の教ふる学科を分つて八級となし、半年毎に業を試み、試に中たるものは一級を進む。その成績優良なるものは特に超進を得、鼎甫志を励まし精を専らにし、夙夜研究し学級毎に次を越ゆ。居る僅に一年にして全科を卒業す。同学の諸生皆舌を巻いて畏服し、名声漸く四方に馳す。京師の赤沢寛輔その名を聞き、洪庵に乞ひ延いて自家の塾頭となす。嘉永四年江戸に遊ばんとし、益々その術を研磨し曾て訳述せる診則稿本を売り金若干を得、遂に東行し伊東玄朴に就いて学ぶ。幾もなくして阿波侯の聘に応じ侍医となる。次いで幕府に辟

図1 津下—島村家系図



され医学所教授となる。維新の後医学校教授となり、大学少博士に進み、文部中教授となり、東京大阪等に奉職し、名声噴々たり。晩年多病の故を以て官を辞め、風流文墨を以て自ら娛む。明治十四年二月五十二にして没す。鼎甫最も漢文に熟達す。故にその訳する所の文辞條達明暘世争うて伝誦す。当時訳書の医校及諸家に出づるもの、多く氏の校閲を経て行うという。訳著生理癸蒙、創夷新説等あり世に行はる。」

次に谷中墓園にある彼の墓表にはつぎの言葉が刻まれている。

『学士大夫居心接物惟忠実為本。溢而施於芸能技術。無適而不可。声利之士。内於嗇而外於豊。銜虚而求盈不乖則墮矣。吾友鉉仲備前津下古庵翁之子。翁以医為業。忠篤質実著於其土。鉉仲亦医。其居心亦有翁之遺風哉。鉉仲以医仕阿波侯。以医参幕府学事。明治元年至七年。以医為助教試補。為教授。為大学小博士。為文部教授。為文部六等官。而察其技術所及。如一無所施。吾常怪之。鉉仲之言曰。死生亦大矣。医术実閑焉。兢兢業々惟幾微猶恐不及。豈淺学所遽施哉。靡人以学資性命而營己生。吾不為之。然則内不足而欲外有余。己無德而欲得其報。既自欺。又以欺人。是鉉仲所恥也。嗚呼以是推之。鉉仲之居心亦可謂得忠篤質実矣。雖然鉉仲豈意無所施哉。顧其用乃不同焉耳。鉉仲之言曰。学医者不可不先究生之所以為生。於是有所生理癸蒙之訳。曰。施医术須先就其要而易見而為之。於是有所創夷新説之訳。鉉仲之書一出。而世之学者有所資而裨。有所師而法。不翅宝筏甘露。鉉仲十数年歷官於教授博士。而後進仰而稱之曰柴軒先生者。抑以是哉。鉉仲名鼎。柴軒其号。祖其島村氏来嗣津下氏。鉉仲亦出嗣島村氏。兄有。曰精齋嗣家。鉉仲初游学於姫路仁寿山校。後游浪華從後藤松陰学。既受和蘭学於緒方洪庵。年二十四来江戸。明年筮仕阿波侯。晩多病罷官以文墨自娛。興第於麻布広尾。極園池遊觀之美。時招朋友故旧燕飲于其間。書画玩披陳滿座。疾甚。移居愛宕下。未幾。明治十四年二月某日卒。年五十二。葬於谷中天王寺側。卒之三年外族難波某致夫人氏言求表其墓。吾与鉉仲親厚。悉其平生。故不敢辞。叙其所以居心忠篤質実者。其他則人亦知之矣。夫人喜多氏無子。井龜泉銘』

鼎甫は岡山で成長するが、当時シーボルトの遺児稲が弘化二年二月から嘉永四年九月にかけて六年八か月の間、同市下之町で開業の石井宗謙の所に滞在する。鼎甫の養家先の上之町は中之町を隔てて下之町と相接しているので、当然鼎甫は宗謙、および稲の顔を見知っていたであろう。また後に親しい交遊を続けることとなる宗謙の長男、久吉の幼い顔も知っていたかも知れない。そしてこれが彼を蘭学に向かわせる契機となったであろうことは容易に想像されるところである。

二・適塾および初期の蘭書翻訳

以上の如くで鼎甫の適塾入門⁽⁷⁾は嘉永五年、二十三歳の時であるが、それよりまえ姫路の仁寿山校で学び、また大阪で後藤松陰に師事したことは上道郡誌に記載の如くである。当時同じく松陰塾に学んでいた西周の『自伝草稿』の中に(中山沃著⁽⁸⁾から)、西が嘉永三年三月五日、塾の寄宿生活を切上げ、曾根崎の僑居に転居したところ、そこに二人の塾生が寄宿していた。「同寓中村雅堂播磨の人、島村鵬輔備前の人、のち鼎甫と称す」との記載があり、鼎甫と西はしばらく同じ屋根の下で生活したようで、当時鼎甫は二十一歳、西二十二歳であった。「草稿」はこの記述に続いて備前岡山出身の松岡隣(画家松岡寿の父)の記載があり、共に浪華での青春の日々を過ごしたはずであるが、その後の詳しい交遊についての記録はない。

さて鼎甫の適塾への同年入門者は大鳥圭介、坪井信友など三十四名である。入門帳には備前嶋村貞藏と記されており、入門番号は二四六番である。彼の適塾在籍中における記録については上記の如く「成績が抜群であったこと、在籍期間も一年ばかりで全科を卒業、同学の諸生皆舌を巻いて畏服した」こと以外には特に記録らしいものはない。しかし果た

して一年で蘭学の修得が可能であったであろうか。私としては適塾入門以前から、或いは岡山在住当時から石井宗謙、またお稻さんの存在が彼への蘭学への関心を高めていたものと推測するものである。なお鼎甫が在塾中に書いたものに先の塾頭渡辺卯三郎に対する送別の詞とも言うべき『送渡辺君士愚序』⁹⁾なるものがあるが、これは漢蘭の医を比べ特質を論じた上、両者がいがみ合うことなく互いに長所を取り入れるべきことを述べたものである。

さて墓表によれば二十四歳で江戸に出て、二十五歳で阿波侯の侍医(二十五人扶持)・新人物往来社(全国三百藩家臣辞典より)となるが当時としては蘭学が出来ると言うのみで諸藩はこれを侍医に取り立て医学のみならず兵学、砲学、その他の新知識の導入を意図したようで、鼎甫にもオランダ陸軍士官学校が一八五一年に発刊した『Voorschrift op het tirail-leuren』を訳し、安政四年に出版した高島秋帆の『撤兵演式』五八丁全一冊がある。所荘吉氏によれば撤兵隊編成に関する訳書としては早期のもので、その後安場敬明の『撤兵定則』(安政五年)、訳者不明『散兵教練図解』(安政五年)、大村益次郎訳『撤兵隊操式』(慶応元年)などがあるが『撤兵演式』はその先鞭をつけたものであろうとのことである。

次に偶然ながら昭和十五年発刊の『医譚』誌上に志賀勇¹⁾氏の記載になる「扶氏漢訳医戒と布清恭」なる論文のなかに大洲の藩医山本政美(有中、節庵)の訳した『扶氏診断』なる書物は山本自身の訳でなく、島村某が訳したものを買い取って上木したと言う記録を発見した。内容は当時宇和島の町医であった布清恭(のちの志賀天民)も「フーフエランドの診断の項を訳し上木すべく藩に許可を申し出た(稿本藍山日記、安政二年九月二十二日)が、安政三年八月藩命によつて長崎留学中の友人村田蔵六から島村と言う人が同一のものを訳し、それを山本中有が買い取って上木したという」ことを報らして来たので止むなく出版を見合わせた」というもので、これは当時宇和島市伊達図書館館長であった兵頭賢一氏から知らされたとのことである。ここに志賀勇氏は布清恭の子孫に当たられる方である。

さて島村某なる者が鼎甫であると言うはつきりした根拠はない。しかしその可能性は充分にあり得るところで、当時の蘭学者と考えられる芝蘭堂、象先堂、及び適塾の門人名簿の中に島村姓の者は鼎甫以外には認められない。只一人曰

習堂門人の中に島村姓の者を見るが、年代的に無理があると思われる。ただし山本有中の名は象先堂門人の中に認められる。豪放磊落の性格で、常に護身用ピストルを保持するなど奇行も多かった人のようである。

一方既述した『備作医人伝⁽⁵⁾』の中に鼎甫は「嘉永四年江戸に遊ばんとし、益々その術を研磨し曾て訳述せる診則稿本を売り金若干を得、遂に東行し伊東玄朴に就いて学ぶ」の言葉があり、ここに『診則稿本』なるものが即ち『扶氏診断』に該当するように思えてならないのである。ただし嘉永四年は鼎甫の適塾入門が嘉永五年であることから間違いであることは確かであるが、在塾一年として江戸に向かったのは嘉永六年の暮れか安政元年であったはずであり、その間に洪庵の手元にあったフーフエランドの書籍に接する機会があったはずである。勿論診断の項を全訳したかどうかは不明であるが、これを売り旅費、また江戸での当座の金としたことは当然考えられるところである。ただ鼎甫と山本政美との間にあつて村田蔵六がどう関与したかは明らかではない。年齢的には蔵六が五歳年上であり、適塾在塾期間にも多少のずれがあり、二人が共に机を並べた期間はない。しかし蔵六の宇和島藩出仕は嘉永六年十月であり、長崎出張は安政元年八月であるので時期的に考えてもあまり無理はないようである。

いま内田仲氏⁽¹²⁾の御好意により山口市歴史民族資料館の大村益次郎文書目録の中に襖の下張りから出て来たと言う志賀(布)清恭から村田蔵六宛の安政?年霜月五日の手紙があるのを御指摘戴いた。これによると「上木の儀の山本氏より願相済候趣に付草稿願書等乞下げの処伺出候に付定めて此頃は先生えも何等御沙汰御座候哉と奉存候」との記載があり山本氏の上木が決定、自分のものは取下げざるを得ない無念さが滲み出ている。以上でこの間における村田蔵六の関与が知られる。

なおこの件については丹潔編『大村益次郎』(昭和十九年)にも、また兵頭賢一著『伊達宗城』(昭和十年)にも志賀天民の次男であり林学博士であつた志賀泰山氏の談として同様の上木中止の経過が記載されているが、志賀家では天民(清恭)の折角訳した原稿が出版に至らなかつた無念さは容易に理解され、言葉には出さないうまでも家庭内では繰り返し話さ

れ、言い継がれて来たであろうし、それが談の形で発表されたのではあるまいか。

なお鼎甫の最初の出版図書である『撤兵演式』は安政四年の発刊であり、『扶氏診断』の発刊は安政五年)、兵学にも関心を持っていた点、村田蔵六との関連を示すものと思われる。

三、江戸での活躍と蘭書翻訳

さて福沢諭吉が適塾を去り江戸に出るのが安政五年秋であるが、それから間もなく鼎甫を訪ねた時のことについては『福翁自伝』⁽¹⁵⁾の中に記されているが、その一部を記載すると「大阪の書生は修業するため江戸に行くのではない、行けば教えに行くのだというおのずから自負心があった。私も江戸に来てみたところで全体江戸の蘭学社会は如何いものであるか知りたいものだと思っている中に、或る日島村鼎甫の家を訪ねて行ったことがある。島村は勿論緒方門下の医者で、江戸に来て蘭書の翻訳などしていた。私も甚だ能く知っているので、尋ねて参れば……略……」と後に発刊する訳書『生理発蒙』の翻訳のことが書いてある。鼎甫は諭吉より年齢的にも、適塾入門についても三年程先輩であるが、以後親しい付き合いをするのである。なお晩年には諭吉の世話になりながら死を迎えるが、これは後の話。

安政四年五月伊東玄朴は大槻俊斎、坪井信道、桑田立斎などと謀り江戸の蘭方医より醸金を募りお玉ヶ池に種痘所⁽¹⁶⁾(大医学部前身)を設置する。応ずる者八二名、中に島村鼎甫の名も認められる。この種痘所は火災などもあり、のち下谷和泉通に移り、文久元年十月幕府の西洋医学所と改名され大槻俊斎が初代頭取となるが、文久二年四月九日死亡、後任には緒方洪庵が推薦される。これはちょうど鼎甫の兄精斎が洪庵と共に中国、四国地区の旅に出る前後のことである。洪庵は再三頭取就任を辞退するのであるが、遂に止むなく精斎宛の手紙にも述べられている如くで「命も続き申間敷、先ず此度は討死之期来り候事と明らめ居申候」と言う覚悟で八月五日大阪を立ち、十九日午後江戸に着く。江戸では弟

子の村田蔵六などが色々世話をやいてくれたことは『勤仕向日記』⁽⁷⁾に述べられているが、鼎甫らも当然挨拶に罷り出たはずである。そして恩師洪庵の推挙で石井信義らと共に同年医学所教授職に任ぜられた。

そして洪庵はかねて覚悟していたとおり、翌文久三年六月十日には突然の大咯血で急死するのである。その時の模様については諭吉の『福翁自伝』とか緒方富雄の『蘭学のごころ』⁽¹⁸⁾に詳しいが江戸在住の門人達が集まったのは当然であり、鼎甫もその葬儀には参列したのであろう。八重夫人の日記⁽¹⁹⁾にも門人方追々入れ替わり悔やみに参ると記載されており、「十六日夜には島時(村)老人つや参る。十七日此日島村九つ半迄居る」の語がみえる。島村を島時と誤記してあるが洪庵の死直後の日記には多くの誤字がある由である。やはり気が動転していたことによるものであろう。

洪庵死後は松本良順が第三代頭取となるが他の陣容には変化なく、石黒忠憲⁽²⁰⁾の『懐旧九十年』によれば慶応初年の医学所の陣容は、

教頭 松本良順

教授 坪井芳洲(薬剤学) 島村鼎甫(生理学) 石井信義(病理学) 桐原玄堂(解剖学)

助教授 足立寛(蘭学、理化学) 田代一徳(蘭学、数学)などで学生は寄宿生、通学生それぞれ三十名、計六十名ばかりであったと言う。

鼎甫は教授として学生の指導に当たるとともに翻訳にも従事、慶応二年には彼の最も注目すべき仕事である『生理発蒙』⁽²¹⁾を発刊する。これは先に述べた如く福沢諭吉が江戸は出て間もなく彼を尋ねた当時から翻訳していたもので Douve Luback の著に於る『Eerste grondbeginselen der Natuurkunde van den Mensch, Gouda 1855』を全十四巻として五松楼蔵版で発刊したもので、最後の一卷は付図を集めたものである。『明治前日本医学史』⁽²²⁾によると我が国における実験生理学の父大沢謙二はその青年時代に鼎甫について生理学を学んだとのことで『医談』(明治二十七年)⁽²³⁾の中で次

の如く述べている。即ち「当時生理学ニテ名高カリシハ『リセランド』、『ローゼ』、『リバック』ノ三書ニテ何レモ蘭書ナリ、生理学ノ翻訳中最モ簡明ニシテ生理ノ何物タルカラ普ネク世ニ知ラシメシ效能アルハ島村先生ノ生理発蒙ナルガ、ソノ原本ハ上記ノリバックナリ。因ニ云ウ従前ハ蘭語ノ『メンセレーキ』、『ナチュラルキュンデ』ノ直訳ニシテ人身体理ト言ヒシガ島村先生ガ生理ト訳サレシヨリ此語ガ一般ニ行ハルルニ到レリト覚フ。また富士川²³游の『日本医学史』の中にも「鼎甫ガ生理発蒙十四巻を著し、リバックの書を訳し、これを世に行うに及び、生理の学は始めて普ねく世医の知る所となるに至れり」としているが、本書は量と質とにおいて江戸時代の最後を飾るもので彼の名声頓に盛んになったようである。

慶応二年には鼎甫はまた『創夷新説²⁵』を発売している。これは教頭松本良順の勧めもあり翻訳したといわれ、また戌辰の役も間近かという時代の要請もあつたのであろう。これは Philadelphia の Jefferson 医科大学外科教授 Samuel David Gross⁽²⁶⁾ の原著になる A system of surgery ; pathological, diagnostic, therapeutic and operative の和蘭版を重訳したもので全五巻となつてゐるが、実際に発売されたのは二巻までのようである。『創夷新説』の翻訳部位を原著英語版と比較してみると、その第十章 Wounds and contusions の項に該当しており、創口接合、創口癒合、刀傷、刺傷、裂傷、挫傷、砲傷などの項目につき述べられ、最後に野戦病院のあり方についても述べた戦陣外科学の指導書となつてゐる。間もなく始まる戌辰の役には本書がよく使用されたようで、奥州出張病院頭取として活躍した関寛齋⁽²⁷⁾も漢方医が実戦には全く役に立たないため、この書を取り寄せ西洋医学の速成教育と実地とを結び付けて行つたとのことである。さてこの Gross の原著は当時数版を重ねた世界的名著であり、その後も田代一徳、石黒忠憲らにより各所が翻訳出版され、その数は十三種類にもなった(阿知波五郎⁽²⁸⁾)と云うが、その最初をなしたのは鼎甫であつた。なお Gross には別に南北戦争中に書いたという A manual of military surgery なる書物があり、鼎甫の創夷新説はこれの訳だと考えられ

たこともあるが、両者は全く別のものであることを確認した。

さてこれが何時頃のことか明らかでないが石河著『福沢論吉伝』⁽²⁹⁾のなかに次の如きことが記載されている。「安藤正胤は初め島村に就いて蘭方医学を修めていたが、当時既に蘭医の間にも英学の必要が感じられたので一日島村に向かつてこれを語り、何処の塾に学んだらよいか相談したところ島村は一言の下に福沢塾の名を挙げたので其の言に従って鉄砲州の先生の塾に入門したと自ら語ったことがある」と言う。

これは当然で誰の心にも蘭学のみでよいのかという疑問はあつたはずであり、先に石井宗謙あての手紙に緒方洪庵さえ英学の重要性を指摘していたところで、鼎甫も当然英学の必要性を認識し、その勉強も始めていたであろう。その確固たる記録はないが後に桑田衡平とか石井信義の訳した米、英書の校閲、参校などに関与していることでも知られるところである。

四、明治初年における東校での活躍

慶応三年十月には大政奉還が、翌四年（明治元年）一月には鳥羽・伏見の戦いがあり、次いで四月には政府軍の江戸入城となる。これにより幕府の医学所はお玉が池以来十年で消滅するがやがて新政府に引き継がれ、鼎甫は坪井為春、石井信義、司馬盈之、緒方惟準らとともに明治元年十二月十日には東大医学部の前身である医学校及開成学校の二等教授に任命される。横浜の軍陣病院には戊辰戦争の傷病者が収容され英医シドルが治療に当たっていたが、これを東京に移し医学校と合併して『医学校兼大病院』と称することとし、やがて東北戦線に参加、傷病兵の治療にあつていた英医ウイリスも帰ってきたので、これを大病院長として傷病者の治療に当たらしめるとともに病院も次第に落ち着きを取り戻したのを幸いそろそろ学生への講義も始めることとなる。

ウイリスの講義については語学の天才司馬盈之が口訳し、これを石黒忠恵が筆記したとされる英医偉利士氏口授『日

『講紀聞』⁽³⁰⁾なるものがあり、その題言を恐らく当時の講義とその編集の責任者であつたであろう鼎甫が次の如く書いてゐる。即ち「学校ノ規律未ダ全ク立ス、漸ク今此夏秋ノ際ニ至リ瘳ヲ病ムモノ過半瘳テ院ヲ退キ教師亦始テ暇ヲ得ルニ随テ、此ニ毎朝講筵ヲ開キ傍ラ其説ヲ筆記シテ」云々とし日付けは明治己巳二年冬十月とし、島村少博士識としている。講義の内容はサイム氏の外科書によつたものようであるが、鼎甫も教育の責任者として多忙の日々を送つていたのであろう。

当時は幕府の崩壊から新政府への移行期にあり、大変な時代であつた。世は尊皇攘夷、開国派と抗争を繰り返し、桜田門外の変以来多くの人が暗殺に倒れるのであるが、蘭学関係者もしばしば身の危険を感じたようである。ところが明治二年一月五日には時の参与横井小楠が京都寺町において刺客数名に襲われ死亡するのである。しかも驚くことに刺客の中に鼎甫と同じ郷里で、しかも同姓の津下四郎左衛門(備前上道郡沼村沖益、名主三郎右衛門悴で土屋延雄と変名。二十四歳)がいたのである。津下四郎左衛門については森鷗外⁽³¹⁾の歴史小説に詳しく記載されているが、のち捕らわれ翌年十月十日斬罪となる。この事件は間もなく鼎甫にも知らされたであろうが、かなりのショックであつたであろうことは間違いない。

更に鼎甫にとつてはこの年明治二年三月五日には父古庵の死があつたことを忘れるべきでない。彼は勿論帰郷したところであろう。後に彼の撰文が父の石碑の裏に刻まれることとなる。これについては『備作医人伝』⁽³²⁾にも記載されているところである。

さらに当時の新政府の重大問題は日本医学の進べき方向をどう決定するかと言うことであつた。即ち蘭学は最早世界に通じる学問でないことはほぼ明らかであつたが、今後範を英に採るか新興の独に採るか、また仏に採るかの決定であ

る。医学校は最早英医ウイリスが中心となり講義を開始しており、時の大学別当（文部大臣）山内容堂は英国びいきであり、それに維新の立役者薩摩藩が英国を支持、鼎甫らを含む医学校の教官らも大部分の者が英国支持でほぼ英に範をとることに決定していたかに見えたのであるが、医学取調御用係（大学権大丞）に任ぜられた佐賀藩相良知安、福井藩岩佐純らが協力に独をおし、容堂退任の後を継いだ鍋島閑叟、また大隈重信、副島種臣らの支持も得て強引に世論を逆転し独国内に範を取ることにし、独医二名を迎えることに決定する。以後日本の医学は独を中心に進行するのであるが、今から考えて英、独、何れが得であったであろうか。現在から考えれば遠回りした感がないでもない。独特の理論主義、權威主義が現代の日本医学の進歩を引っぱっている感がないとしないからである。

次にここに明治二年九月二十九日付けの洪庵夫人八重さんの渡辺卯三郎（同母）宛の手紙を引用しよう。卯三郎は洪庵初期の門人で塾頭もした人であり洪庵の二子、惟準と惟孝を大聖寺に連れ養育した人でもある。内容は子供のこと、東京から大阪に帰ったこと、洪庵の法事のこと、自分の病気のことなど述べたのち長崎にいた蘭医ボードウィンが大阪に來たこと、岩佐、相良兩人が來阪、ボードウィンと仮病院を始め患者も集まって來ていること、ところがまた岩佐らがらないこと、大阪では洪哉（惟準）がボードウィンと仮病院を頼んで東京行きを納得させ惟準も近く東京に參ることを述べ、また「岩佐氏にも追々御上阪のよしに御さ候、島村（鼎甫）事も上阪の由に御さ候。又々此地の病院も一変革仕候半と存候。扱々うるさの世に御さ候」とし更に子供のこと、実家名塩村に土地を求めたこと、長州の村田御立寄被下久々にて何事も承り咄致申……と述べている。これにより維新の混乱期に医学校運営のため多くの人々が行き來していたこと、またボードウィンとウイリスの微妙な関係など極めて興味深い。

この中に鼎甫の名が出るが、鼎甫が果たしてこの頃大阪に來たか否かはつきりした記録はない。しかし文面からしてその目的は医学校の設立、運営、教育面にあったであろうことが想像され、面会の相手は惟準かボードウィンであった

であろう。

更に興味深い点は村田蔵六（大村益次郎）が八重夫人を訪ねている点である。大村は軍防事務局判事という軍政上の最高職として上野の彰義隊を討滅、次いで五月には五稜郭の榎本軍を撃破、戊辰戦争を終結し、今や兵部大輔（軍事大臣）として恩師の未亡人八重夫人に無沙汰を詫び、近況など報告したのである。彼の大阪、京都の視察の目的は宇治に置く火薬庫や、大阪に置く兵学寮、兵器工廠の予定地の実地検分にあつたようである。彼は緒方夫人を訪ねて一週後の九月四日京都三条木屋町二番路地の宿で刺客に襲われ、大腿部を損傷、その際は生命は取り止めたものの疵の経過が思わしくなく大阪の惟準、ボードウインが駆けつけるが、処置は大阪が便利ということで十月二日に大阪仮病院に移すも敗血症を併発、同二七日にはボードウインによる大腿切断が行われたが、結局十一月五日死去する。

さて鼎甫が九月の始めにでも大阪を訪れていれば、当然先輩であり以前よりよく知っている大村益次郎を見舞つたことであろう。なお大村の看護にはシーボルトの娘イネ、及びその娘夫婦である三瀬周三と高子が当つたことはよく知られている。

明治三年も鼎甫にとって多忙な年であつた。プロシアから招聘することに決まつたドイツからの医師は普仏戦争のため中々来日しない。学生からは色々苦情が出たようで、和蘭医官抱独英氏口授の『日講紀聞』³²の題言に鼎甫（島村少博士）は次の如く書いている。

『曩ニ教師偉利士氏ノ我東校ヲ去ルヤ朝府更ニ普魯社国ヨリ医官二名ヲ徴シ以テ之ニ代ラシメント欲ス然ルニ普国此頃仏国トノ確執起リ其難関ニ赴クヲ以テ未ダ来ルヲ果サス。是ニ於テ滿校ノ生徒大ニ失望ス。時ニ偶大阪医校ノ教師抱独英氏今秋代滿ノ期ニ当リ已ニ暇ヲ告テ横浜ニ来ルニ会フ。因テ官権リテ姑ク此人ヲ款留シ以テ聊カ生徒ノ望ヲ慰シメント欲シ一旦之ヲ留レドモ肯セス。再三強テ留レバ則チ皤皤タル老翁涙ヲ垂テ固辞ス。然レドモ生徒欽暴ノ情甚ダ切ナレ

バ決然臂ヲ攘テ去ルニ忍ヒス終ニ僅カニカ月間留ルヲ可ス。是即チ抱氏ノ今暇リニ教職ノ闕ヲ補スル所以ナリ。以下略」。

ここにボードウィン氏に無理を願つて二か月間の期間延長を願ひ講義を願つたのは鼎甫であつたのであろうか。そして講義は神経、飲食消化の二編についてであつた。

その他明治三年五月には福沢諭吉が腸チブスに罹かり人事不省となるのであるが、九鬼隆義宛の手紙に次の如きことが記載されている。「仮に三、四年前此大患に懸候義も御座候はば萬々全快を望むべきにあらず候得共、今日此都下に居り、此良医の治療を蒙り、此良友の介抱を受け、始て全快を取り候義、所謝は医師と社中の朋友に御座候。医師はアメリカ人セメンズ英人ウエルス兩人を頼み、療法頗る新奇、日本の医師は伊東玄伯、石井謙道、島村鼎甫、隈川宗悦、他に横浜の友医早矢有的専ら苦心いたし呉、先ず日本にては最上の治療を施し候事に御座候。」

明治三年八月には最初のドイツ官費留学生が出発するが、これに関連して石黒忠憲の『懐旧九十年』⁽²⁰⁾の中に次の如き記載がある。即ち「島村、石井の両先輩から私にもドイツ留学志願を内々勧めてくれましたが私はこれを謝して昂然次のような意見を述べました」。として今我が国医界の焦眉は一日も早く新方医を成業させて全国に配置することだ、自分が出掛けると我が医学に遅滞を生ずると彼らしい反論をしたようである。

明治四年には大学東校が単に東校と呼ばれるようになり、鼎甫は文部中教授となる。八月中に独逸よりミュラー、ホフマンの二人が来日、ドイツ語の講義が始まる。長与専斎の『松香私志』⁽³⁴⁾によると、明治四年の当時空しく日々を送りしが一日島村氏の許に至り二・三の知人も来たり四方山の物語なしける内今度政府より使節を欧米各国に派遣し各省の理事官も同行するよし話せる人のありけるに驀然として心に浮ぶ事のありしかは其席を辞し、直ちに車を飛ばして井上伯を海運橋の邸に訪ひけるに芳川子爵先きたちて客室……略……伊藤侯爵、木戸侯爵、田中子爵、大木伯爵らを訪ね一昼夜の奔走でほぼ決定、十一月には岩倉使節団の一員として欧米視察に参加、医事制度の調査をすることが出来たの

である。

明治五年一月には鼎甫のすぐ下の妹『里ふ』が亡くなるのであるが鼎甫は帰郷したのであるうか。はっきりしたその記録はない。そして明治五年には桑田衡平訳の Pennsylvania 大学の教授 Henry Hartshorne 著の『内科摘要』⁽³⁵⁾ (Essentials of the principle and practice of medicine, 1869) 全二巻が発刊され、当時圧倒的な売行きを示したと言いが、そのうち三巻から六巻については鼎甫の校閲をうけたとの記載が表紙に印刷されている。鼎甫は洋学のみならず漢学にも特別な素養を持っていたようで、後年訳本の校閲をしばしば依頼されたようである。「その訳する所の文辞條達明暢世争うて伝誦す。当時訳書の医校及び諸家に出つもの、多く氏の校閲を経て行う。」とは先にも述べたところである。そしてこの頃も若い学徒の教育に当たっていたようで、医学図書館設立に努力した石川喜直も鼎甫の許で博物、理化、解剖、生理、薬物、病理を数年にわたり修業した(『医譚』復刊五七号一八頁)との記載がある。

明治七年度については彼の親友石井信義⁽³⁶⁾⁽³⁷⁾⁽³⁸⁾の日記が現存しているので、これを通して彼の生活状況を知ることが出来る。この日記は岡山旧勝山藩主三浦氏、次いで医師の岡本氏、さらに岡大中山名誉教授の順で筆写されたものを拝見したのであるが、その後落合町教育委員会編になる『郷土の蘭医―石井宗謙の足跡をたどる』の中にも含まれている。日記は日々の出来事を綿密に記録したもので一日も欠かさず記入されている。しかも鼎甫との交友が最も頻回に記載されており、数えて見ると一年で七五回の多きに鼎甫の名を見るのである。島村を訪ねた、島村が訪ねて来たなどで十二月八日の項には「丹氏訳稿持参、校正を頼む。晩食を喫し食後心事を語る。大いに鬱胸を慰せり。誠に益友なり」などの言葉が見える。その他友人として福沢諭吉、長与専斎はじめ長谷川泰、佐々木東洋、緒方惟準など多くの交友が記録されている。当時信義の医務局からの月給は百五十円で税金七円五十銭、手取り百四十二円五十銭とのことで信義より年長の

鼎甫のそれはこれと同じか、或いは多少多かつたかもしれない。これに翻訳図書からの収入もあり当時としてはかなりの高い所得を得ていたのであろう。鼎甫はこの年の二月十二日には編書課の課長となっている。

そして七月には熱海に避暑に出掛け、藤屋に滞在、信義と落ち合うのを楽しみにしていたが岡山からの連絡で妹「てい」（古庵と後妻である多賀との間の子、鼎甫にとっては異母兄妹）の婿貫吾が大病とのことを知り急遽東京に帰り、八月十三日東京発、十五日神戸、十七日岡山着、岡山には十一日間滞在する。貫吾の墓碑よりすれば命日は明治七年八月十四日となつていたので葬儀には間に合はなかったが、故人を偲ぶとともに、兄妹との久し振りの会話を持ったことであらう。そして二十七日岡山発、二十八日神戸、大阪に二―三日滞在し、京都を経て陸路七日で箱根に着く。日付けは鼎甫の手紙の内容を信義が日記に書き留めたものであり、「三十日足らずにて備前まで行きゆるゆる見物、往復せり、誠に便利の時節といふべし」と記していたと言う。

しかしこの年の九月十四日、即ち鼎甫は岡山帰郷中に医務局の人事刷新があり鼎甫、信義、その他共々出仕御免、位記返上の連絡が文部省よりあり、と言うこととなる。このことに付き長与専齋は『松香私志』³⁴のなかで「省内の刷新を謀り大小丞以下罷免の人も少からず、相良、島村、石井、坪井などの人々も亦其中にあり、交友の情誼いたく心に掛かりける折りから、意外にも相良校長の後任は余にくだり……やるせなく……」の言葉が記載されている。

さて鼎甫の家庭生活については殆ど記載らしいものが残っていない。住所は麻生広尾町三十三にかなり広大な屋敷を構え、庭にも趣向を凝らしていたようであるが何時頃からここに住まいしたか、それ以前はどこに居たかなど明らかでない。広尾の家には福沢諭吉などもしばしば訪ね米搗運動³⁹などしていたと言うから、かなり以前からここに住まいしていたのであろう。妻は能楽十二代喜多平太の次女ゆき（遊喜子、天保十四年七月十五日生）で鼎甫とは十三歳違いである。先に越前松平慶永公の奥御殿に仕え、中臈になっていたと言う。子供が出来ないため、鼎甫の妹で明治五年に亡くなつ

た「里ふ」の子「慎」と前川玄泉との間に出来た長女「こう」を養女とし、実子として育てることとする。即ち津下—島村家系図に示した如く「里ふ」(龍)は最初御津郡玉柏の守井貞作の次男泰造に嫁し「慎」を生むが泰造死去のため「慎」を連れ子して片上の前川準(蘭学者)と再婚、のち「慎」は前川玄泉に嫁し「こう」(幸)を生むのである。「こう」の生年月日は明治六年十月十五日であり、二歳で鼎甫の養女となると言うから明治七年前後のことであろう。また先に夫を亡くした鼎甫の妹「てい」は縁あつて阿部家に嫁ぎ、貫吾との間に出来た長男鉄太郎は兄精齋が引き取つて養育、成長して第三高等学校医学部を卒業、眼科学を専攻、のち藤原家を継ぎ藤原鉄太郎として岡山医学専門学校教授、岡山県医師会長などを勤めるのである。鉄太郎については奥沢康正⁽⁴¹⁾氏の調査がある。

明治八年には坪井為春、石井信義訳になる英医 Thomas Hawks Tanner 著の丹氏医療大成⁽⁴⁰⁾ (Practice of medicine. 1884年初版で七版を重ねた名著) 全六巻が発刊される。これについても三巻以降については鼎甫がその校訳に参画しており、その序も鼎甫が書いているが中に「独医察病証於書室。英医視病証於枕席。」なる語がある。読者はこれらの点を念頭に置きながら本書を読んで貰いたいと言うのである。鼎甫はその推薦の言葉として何を言わんとしたのであるか。本書は英書の訳本である。明治四年来ドイツ医学が始まったが、英書の良さも忘れてはならない。自分としては英書の方が良いと言外に言わんとしているようにも思われる。

五・晩年の鼎甫

明治八年六月十日、洪庵の命日には駿河台の惟準の家で十三回忌の法要が行われる。集まるもの三十八名、なかに鼎甫の名が見える。八重夫人を中心に写真を撮ったようであるが、この写真は現存しない。席上福沢諭吉が立つて演説をこころみた。毎年恩師の命日に緒方家に集まって洪庵の霊を拝し、且つ同窓の交誼を温めようと言うのである。この提

案は入れられ、翌明治九年六月十日に第二回の会合が同じく惟準の家で持たれるが、この時の写真は現存し適塾二階、塾生大部屋の奥の部屋の壁に展示されており、その左上に鼎甫の顔が見える。なおこの年には松本良順はじめ佐藤尚中、戸塚文海、他約五十名のものが率先して医師会の始まりである医学会社を起こすが、鼎甫は勿論その中に名を連ねている。

そして時期は明らかでないが明治十二—三年頃であろうか、彼は卒中に罹り半身不随となるのである。福沢諭吉(29)から安藤正胤宛手紙。「横山訊殿より毎々度々の文通、其煩に堪えず、先日御話申上候彼の翻訳書の出版も、石井杯の説にてはあまり面白もある間敷、何とか話合致度、止む得ざれば島村も放心の罰として泣々金を出すことなり。横山も放心者を相手にしたる因果として少しはまけるがよし。其辺の御含を以て御面倒ながら横山を尊宅へ御招き御熱談被下間敷哉。小生も実に因り果候次第に御座候。右願用申上度、早々頓首。」

また鼎甫の代筆として福沢は横山あてに下記手紙を書いている（一部略）。

「陳ば先日島村家へ御遣し相成候フール氏内科書訳本、兼て主人より御依頼候義に有之候哉。昨年以来主人も大病にて実は健忘同様の始末、旁以不都合、昨今この訳書出来候とも実は出版の見込も無之、当惑の次第なり。就ては今後御翻訳は御見合被下度、且又御謝礼等の義も当今不如意の始末、是等の事に付ても御熟談不致ては不相叶次第なり。兎に角この跡の訳は断然御見合被下度、為念申上候。主人は病氣に付福沢諭吉代筆如此御座候。匆々。」

以上で鼎甫は卒中発作の直前までは翻訳の仕事を続け、訳書出版を意図していたのであるが、発作以後健忘の状態となったようである。この頃のことであろうか、石河幹明著の『福沢諭吉伝』(29)によると、大学東校当時は相当に財産もでき麻布に手広い屋敷を持って書画骨董など集めていたが晩年中風に罹って起居不自由となり、家計も不如意となり約三千坪の奇石珍木を配した邸宅を矢野二郎（東京商業学校長、貴族院議員）に売却する事となる。最初広大な屋敷のため容易に買手がつかなかったところ、或る人の紹介で矢野がこれを譲り受けようと値段の交渉があつたとき、福沢が買手の名

を尋ね矢野二郎であると聞かされ「やあ矢野か、あれは金がないから止めた方がよかろう」と例の悪口をいわれたところ、矢野がこれを伝え聞き「言い値で買う、値段を負けて貰うに及ばぬ」と売買の契約が成立したと言う。その後も何かあったようであるが鼎甫は結局屋敷を売却し、のち愛宕下に転居するが、その場所は不明である。

また或る時福沢が鼎甫を見舞い、骨董道楽を止めるようにと懇々忠告した。すると島村も言に従って、爾後道楽は一切やめることを誓うが、差し当たり欲しくならぬ物が一つある、これだけは是非許してくれと懇願した。でその欲しい物は何かというに、孔雀を飼ってみたいとのこと、流石の福沢も啞然としたと言う。中風のために精神障害、情緒障害また性格変化を来していたのであろう。

なお石河氏の文中に鼎甫は「晩年中風で起居不自由のみならず、妻に別れ子供もなく淋しい生活を送っていた」と書いているが、病後は特に夫婦仲が良くなり、妻「ゆき」は実家が近いこともあり別居生活が多かったのであろうか。

そして『東京医事新誌』の明治十四年一五四号二四頁に島村鼎君の訃として「前文部中博士島村鼎君は久しく半身不遂症に罹り居られたるが頃日間に面療を發し大学医学部附属病院に入りて療養せられしが二月二十五日死去し同二月二十七日谷中天王寺に葬られたり。」と掲載されている。当年五十二歳であった。鼎甫没後は友人数名打ち寄り種々相談の上で後見役となり家事万端の顧問に任じたのであるが、後見たりし人は福沢諭吉先生はじめ、長与専斎、佐々木東洋、牧山修郷、石井信義、安藤正胤などの諸先生であった（加門桂太郎¹⁴）。

以後未亡人「ゆき」（遊喜子）は養女「こう」（幸）を養育し、上記後見人の方々の世話で明治十八年七月十六日には中村俊一を養子とし迎え、入夫婚姻の手續きを終えている。俊一は明治二十年東京帝国大学を卒業、二十四年欧州に遊学、二十七年京都府立医大の精神科教授、三十三年同校校長となり同校発展の為に尽力する。大正六年十一月十一日には島村俊一医学博士寿像除幕式典が同校で行われるのであるが、俊一は病気のため欠席するも、妻の「こう」、実母の中村花子、養母、即ち鼎甫の妻「ゆき」は出席するのである。しかし「ゆき」は翌大正七年六月十七日七十六歳で死亡する。

墓は谷中靈園にあり鼎甫と並び向かつてその右に、また島村俊一、こう夫妻の墓はその左にある。

平成三年四月十八―二十一日の間、京都で第六十四回整形外科学会が開催されたのを機会に十八日京都府立医大に島村俊一の胸像を見るためと、整形外科平沢教授の御世話で俊一につき調査をされている精神科の中嶋昭夫教授をお訪ねした。同教授は先任久保教授（島村こう遺言執行人）の意思をつぎ島村俊一、こう夫妻の宅地を売却、これを府立医大に島村基金として寄贈の手続きをされると共に、精神科教室百年誌編纂を予定されており、津下家と「こう」との関係についても興味をお持ちであった。この日は医学部長、事務部長その他色々の方の御世話になり、俊一の旧宅の跡も見せていただいた。さらに中嶋教授の調査で島村鼎甫、俊一の位牌が京都黒谷の西翁院に有ることを知らされ、翌日十九日平沢教授の案内で同院を訪ね位牌を拝することが出来た。立派な位牌で鼎甫夫妻、俊一夫妻のもの他に鼎甫（柴軒）の実父母、養父母、妹前川里ふのものがあつた。

位牌の拝見を終わり院の門を出ると、門前の八重桜が満開であつたのが特に印象的であつた。

本論文の要旨は平成三年六月京都における第九十二回日本医史学会で発表した。またこの論文の作成に当つては中山沃（岡山大学名誉教授）、酒井シツ（順天堂大学教授）、島村湘一郎（鎌倉市）、蒲原宏（新潟市）、江川義雄（広島市）、石田純郎（岡山市）、奥沢康正（京都市）、阿部光章（岡山県）、内田伸（山口市）、志賀勉（吹田市）、前川郁子（岡山市）、藤原深蔵（岡山市）、久保敬（八幡浜市）、清水美（宇和島市）、河野伝（宇和島市）、杉本つとむ（東京都）氏ら多くの方々の御教示を戴いた。此処に深謝申し上げる。

追記：第九六回日本医史学会総会において『扶氏診断』訳者への疑問」と題して本書の訳者が山本美致美でなく島村鼎甫ではないかと申し上げた。ところが京都市の三宅宗純氏より自分の書庫に『扶氏診則』島村鼎蔵訳稿なる写本があるとの連絡を戴き、そのコピーを頂戴した。早速両者を比較検討したのであるが一部に字句の変更、省略等あるものの文の構成はほぼ同一

であることを確認した。よって『扶氏診断』は島村鼎甫訳、山本美致美出版と訂正すべきかと考えられた。

なお『扶氏診則』には嘉永甲寅夏六月の日付けがありこれは嘉永七年である。鼎甫の適塾入門は嘉永五年であるので一年半ばかりの経過で、オランダ語をマスターし、フーヘランドの図書で最も難しい総論の項を訳し、しかもその写本を完成させることは如何に努力したとは言え信じ難いところである。ここで私は鼎甫の養子先が当時石井宗謙が開業していた岡山市下之町と接しており、そこには三歳年上のシーボルト稲が滞在して居たはずで、鼎甫は早くから蘭学に関心を持ち、またその基礎の指導を受けていたものと想像する者である。

文献

- (1) 内藤二郎「津下精齋兄弟」『駒大経営研究』第四卷第一号、九一三九頁、一九七三（昭和四十八年）
- (2) 内藤二郎「内藤家文書願留帳」天保三年、天保四年
- (3) 森紀久男「備前洋学の始祖―児玉順蔵―」三二頁、一九四一（昭和十六年）
- (4) 岡田靖雄「島村俊一小伝―悲運の精神病学者」『日本医史学雑誌』三八卷、六五―九八頁、一九九二（平成四年）
- (5) 岡山県医師会編『備作医人伝』一九五九（昭和三十四年）
- (6) 緒方鉦次郎「日本最初の洋方女医楠本福女史の手紙」『日本医事新誌』一〇二〇号、一〇二二号、一九四二（昭和十七年）
- (7) 緒方富雄「緒方洪庵伝」第二版、東京、岩波書店、一九六三（昭和三十八年）
- (8) 中山沃「西周と備前の洋学徒、医師との交遊」『吉備洋学資料研究』三五―五二頁、一九九四（平成六年）
- (9) 前田幹「新出渡辺家文書」『適塾』第十卷、四五―六九頁、一九七七（昭和五十二年）
- (10) 所莊吉「日蘭学会編」『洋学史辞典』三〇五頁、雄松堂出版、一九八四（昭和五十九年）及び私信
- (11) 志賀勇「扶氏漢訳医戒と布清恭」『医譚』七号、二八七―二九二頁、一九四〇（昭和十五年）
- (12) 内田伸「大村益次郎文書」山口市歴史民族資料館蔵、志賀清恭手紙
- (13) 丹潔編『大村益次郎』肇書房、一二三―一五九頁、一九四四（昭和十九年）
- (14) 兵頭賢一『伊達宗城』愛媛県教育会、松山堂書店、八五頁、一九三五（昭和十年）

- (15) 福沢諭吉『福翁自伝』九七—九八頁、岩波文庫、一九八一（昭和五十六年）
- (16) 『東京大学百年史』通史一、東京大学百年史編集委員会、東京大学出版会、五八—二四三頁、一九八四（昭和五十九年）
- (17) 内藤二郎『洪庵と津下精齋兄弟』『適塾』十七卷、一六—二二頁、一九八四（昭和五十九年）
- (18) 緒方富雄『蘭学のころ』三九三—四一一頁、弘文社、一九五〇（昭和二十五年）
- (19) 浦上五六『適塾の人々』日本出版株式会社、一九四四（昭和十九年）
- (20) 石黒忠憲『懐旧九十年』一五八頁、岩波文庫、一九八三（昭和五十八年）
- (21) 島村鼎甫訳『生理発蒙』慶応二年、広島大学医学部医学資料館
- (22) 内山孝一『明治前日本医学史』臨川書店、二四七—二五〇頁、一九七八（昭和五十三年）
- (23) 大沢謙二『我邦に於ける生理学発達の梗概』『医談』第三二、一八九四（明治二十七年）
- (24) 富士川游『日本医学史』五三〇頁、形成社、第二版、一九七四（昭和四十九年）
- (25) 島村鼎甫訳『創夷新説』慶応二年、東京大学付属図書館、緒方洪庵記念文庫
- (26) Gross, S. D.: A system of surgery; pathological, diagnostic, therapeutic and operative. 1782 岡山大学医学部付属図書館
- (27) 戸石四郎『最後の蘭医・関寛齋』三省堂選書、一九八二（昭和五十七）
- (28) 阿知波五郎『近代日本の医学 西洋医学受容の軌道』思文閣、一九八二（昭和五十七年）
- (29) 石河幹明『福沢諭吉伝』岩波書店、第一巻、一九八一（昭和五十六年）
- (30) 偉利士口授『日講記聞』明治二年、岡山大学医学部付属図書館
- (31) 森鷗外『津下四郎左衛門』『森鷗外全集』第六卷史伝一、岩波書店、一九三六（昭和十一年）
- (32) 抱独英口述『日講記聞』明治三年、岡山大学医学部付属図書館
- (33) 慶応義塾編『福沢諭吉全集』第十七卷、一〇一頁、三九三頁、岩波書店、一九五八（昭和三十三年）
- (34) 伴忠康『適塾と長与専齋—衛生学と松香私志—』一三三頁、一六三頁、創元社、一九八七（昭和六十二年）
- (35) 桑田衡平『内科摘要』明治五年、広島大学医学部医学資料館

- (36) 石井信義「明治七年度日記」中山沃氏筆写
- (37) 緒方銚次郎「石井信義先生の日記帳から」『日本医事新報』千三九号、一九四二(昭和十七年)
- (38) 落合町教育委員会編『郷土の蘭医―石井宗謙の足跡をたどる』一八五―三〇二頁、一九九二(平成四年)
- (39) 土屋栄吉「島村俊一先生」『日本医事新報』一四〇一号、一九五一(昭和二十六年)
- (40) 坪井為春・石井信義訳『丹氏医療大成』明治八年、岡山大学医学部付属図書館
- (41) 奥沢康正「藤原鉄太郎の京都における晩年」日本医史学会関西支部昭和六十三年春季大会、於津山
- (42) 『京都府立医学専門学校校友会雑誌』第八一号、三四―四九頁、島村医学博士寿像除幕式典 一九一八(大正七年)
- (43) 『京都府立医科大学百年史』百年史編集委員会、文功社、一九七四(昭和四十九年)

(広島大学名誉教授・広島県立身体障害者リハビリ・センター顧問)

Teiho Shimamura (1830–1881), His Life and Work

by Kenya TSUGE

The author reported on the career and work of Teiho Shimamura, a last Dutch scholar in Japan.

He was born in Okayama, 1830 as the second son of Koan Tsuge and was adopted into the Shimamura family at age four. When he was 23 years of age, he started to study Dutch learning at Teki-Juku. Later he went to Edo and engaged in translation of Dutch books into Japanese. In 1866, he translated D. Lubach's book of physiology (生理発蒙) and S. D. Gross's book of surgery (創夷新説) and published them with favorable criticism. In 1868, he was appointed as a professor of Higasi-ko, the predecessor of Tokyo University and the lectures of Dr. Wilson and Dr. Bauduin were edited and published as "日講記聞" in 1869 and 1870 respectively. These owe much to Teiho's effort as a person in charge, from his preface.

At the early years of Meiji, many English books were also translated into Japanese and these were mostly proofread and corrected by Teiho because of his Chinese knowledge. In his later years, he was sickly and died at the age of 52 in 1881.